ビューヒナーとグツコー

——三月革命前期の文学と検閲の問題に寄せて——

浜　本　隆　志

序

人と人との出会いは，偶然や運命に左右されるのが世の常であるが，作家にとって他者との巡り会いが人生の転機となり，かつ文学作品を生み出す契機となる場合が多い．ビューヒナー（1813—1837）が存命中，かれと最も深いかかわりを持った文筆家は，当時「青年ドイツ派」の領袖と目されていたグツコー（1811—1878）である．かれは誰よりも早く直感的にビューヒナーの天才的な文学資質を見抜き，『ダントンの死』を世に出した．さらにグツコーは，この無名の新人にドイツ文学の将来を託し，文筆活動で身を立てるよう激励しているが，ここにも批評家グツコーの面目は躍如たるものがある．かれの炯眼と親身の援助がなかったならば，ビューヒナーは作家への道を歩まず，今日のかれの文学的名声も望むべくもなかったかもしれない．さらにグツコーは，ビューヒナーの死去に際し，『フランクフルター・テレグラーフ』にかれの追悼文を載せている．これはヘルヴェークの有名なビューヒナーに寄せた追悼詩と並んで，夭折した詩人に捧げられた鎮魂の挽歌であるといえよう．

さて両者のかかわりを示す資料として，現在われわれの手元に20通の往復書簡が残されている．これは当時の厳しい政治的弾圧下で，二人が現実

と対決した生々しい記録である．通読すれば，才気あふれるビューヒナーと「青年ドイツ派」の闘士であるグツコーの青春の友情や深い人間愛が伝わってきて，今なお胸を打たれる．拙論ではこの往復書簡や他の資料を手がかりにして，『ダントンの死』の出版とその評価の問題，メンツェルをめぐるグツコーとビューヒナーの立場と検閲の問題，さらに「青年ドイツ派」とビューヒナーとの関係を考究してみたい．こうして両者のかかわり合いを通じて，三月革命前期の文学や検閲（政治）の問題を，より具体的に解明しようとするのが拙論の眼目である．

I

文学や批評活動の弾圧は，実際には検閲制度を通じて実施されるのであるが，ここに政治と文学の問題が集約され，両者の対立が顕在化してくる．反体制的な活動を行なったビューヒナーとグツコーとの関係を考察する際に，検閲問題を度外視することができないので，まず最初に，三月革命前期の検閲状況について概観しておこう[1]．19世紀初頭ではフランス革命の影響もあり，「言論の自由」はかなり広まっていたけれども，ブルシェンシャフト運動の結果，メッテルニヒは有名な『カールスバート決議』（1819）によって，学生達やその同調者を弾圧した．この決議は「出版法」，「大学法」，「査問法」，「新執行規則」より成る「五年間の時限立法」[2]（1824年に無期限立法となる）である．とりわけ「出版法」の第一条では，「20ボーゲン（320頁）以下のすべての著作」[3]は，官憲によって「事前検閲」ができることが規定され，ここでは政治的な影響力を与えやすい小冊子の規制に，ウェイトが置かれていた．

さて三月革命前期において，ハイネ，グツコー，ベルネらが文筆活動を通じて糧をえることができるようになったが，これは印刷術の向上，出版業の興隆，産業革命，都市の発達，教育の普及などによって，文学マーケ

ットが拡大した[4]からである．文書の重要性が増し，その影響力が強くなったこの時代を背景にして，封建体制側とリベラル派が検閲と「言論・出版の自由」をめぐり，確執を繰り返した．自由主義者や共和主義者らはフランス七月革命を契機に，直接行動や文筆活動を通じて反体制運動を盛り上げてゆく．ドイツではハンバッハの祭典（1832），フランクフルト事件（1834）などによってその運動はピークをなすが，これらの反体制運動の頻発に危機感を強めたメッテルニヒ封建体制は，その都度，七月革命に対しては『ドイツの安寧維持・確立のための規定』（1830）を，ハンバッハの祭典に対しては『六条項』，『十条項』（1832）を，フランクフルト事件に対しては『秘密ウィーン決議』（1834）を成立させ，迅速かつ周到な対策を講じている．その結果，「出版，集会，結社の自由」はますます制限されてゆくのである．例えば『六・十条項』では，「20ボーゲン以下の外国の印刷物の無許可による自由な輸入，頒布は今後禁止され」[5]，『秘密ウィーン決議』ではメッテルニヒ体制側は「政治的パンフレット」に神経を尖らせ，「検閲のすき間をどこにも許さぬ」[6]よう規定した．こうして「1834年末には，国内の定期刊行物は……当局の管理下に置かれ」，さらに封建体制側から，「反体制作家に敵対する文書によるキャンペーン」[7]が開始されるのである．

以上の体制側と反体制リベラル派がしのぎを削っていた「過渡期」に，ビューヒナーの政治活動や，かれとグツコーとの往復書簡による交流（1835—1836）が行なわれた．このような状況をふまえた上で，次に『ダントンの死』の出版の経緯と，グツコーの「修正・加筆」問題などから，両者の関係に論及してゆこう．

1834年の3月，ビューヒナーはギーセンに「人権協会」を設立，同年5月にダルムシュタットにもその支部を作り，政治活動を開始する．さらにこの頃，かれはヘッセンの農民の窮状を救済すべく煽動文書の『ヘッセンの急使』を執筆して，同志とともにこれを配布する計画をたてる．が，同

年8月1日にスパイの密告によって事が露見し，同志のミンニゲローデが逮捕される．仲間のシュルツはフランスに逃亡，さらにツォイナーも逮捕され，それ以後，1835年の2月にかけて当局の弾圧は厳しさを増し，ビューヒナーにも追求の手が及ぶ．かれはオッヘンバッハの予審判事の召喚に二度程応じるのであるが，三度目には「身に危険を感じ」，弟を身代わりにたてて辛うじてこれを切り抜けるのであった．しかし，もはや追求を逃れられぬと観念したかれは，亡命を決意する．その費用を捻出するために『ダントンの死』が書かれたという以上の経緯は，すでに周知の事実である．

脱稿後，ビューヒナーは当時「青年ドイツ派」とかかわりのあったザウアーレンダー書店に出版を依頼しようとするが，その際，店主と懇意であるグツコーに仲介の労を申し出たのが，両者の往復書簡の発端である．1835年2月21日付のビューヒナーの手紙が，先輩の批評家グツコーを当てにしている事情を表わしている．

> お願いの件は，できるだけ早く原稿を通読していただき，批評家としての大兄の良心が許すならば，ザウアーレンダー氏にこれを推薦していただき，すぐさま御返事を頂戴したいということです．この作品それ自体については，不幸な事情でせいぜい5週間のうちに書かざるをえなかったということ以上，何も申しあげられません．(435)

この手紙の行間から，せっぱ詰まったビューヒナーの立場がにじみ出ている．すぐさま作品に目を通したグツコーは，同年2月25日付の返信で，「あなたのドラマは大変気に入りました．それをサウアーレンダーに推薦しましょう」(474) と述べ，ビューヒナーのために一肌脱ぐ旨を伝えている．直ちに書店に『ダントンの死』の出版交渉をしたかれは，2月28日付の手紙で，戯曲のマーケットは広くなく，多くの原稿料が期待できないの

で，今後は自分の主宰する『フェニックス』に投稿するよう，ビューヒナーに要請する．が，その間にグツコーと出版者との間で交渉が進展したらしく，3月3日付の返信でかれは，ザウアーレンダーが10フリードリヒスドールの原稿料を支払う用意がある旨を伝えている．と同時に書店は，『ダントンの死』の露骨で卑猥な個所を削除することを条件づけたのである．グツコーはビューヒナーの作品の表現が正しいことを認めていたけれども，当時の出版事情からザウアーレンダーの要求を容認せざるをえなかった．

ところでかれは，同じ手紙の中でビューヒナーの亡命先やかれの才能について，次のように述べている．

> だが，あなたは大変お急ぎのようですね．どこへ行こうとしているのですか．本当に足もとに火がついているのですか．わたしは何でも聞きますが，あなたがアメリカへ行くことだけは認められません．そのすばらしい天分をドイツ文学に組み込めるこの近くに（スイスかフランスに），あなたはいなければなりません．というのも，『ダントン』には深い資質が現われているからです……わたしはあなたのような隠れたそんな天才を求めていたのです．(475)

『ダントンの死』しか文学作品を書いていないビューヒナーの卓絶した文才を認め，1835年の時点でかれを高く評価した人物は，グツコーをおいて他にいない．かれはビューヒナーが如何なる事情で亡命しようとしたのかを反体制作家の直感から洞察し，この青年が自分と親近性を持った人物であることを深く認識していたのであった．

グツコーは『ダントンの死』を，かれの主宰する雑誌『フェニックス』に分載し，1835年7月には本として出版するのであるが，かれは『フェニックス』27号（同年7月11日発行）で，この作品を論評し，紹介してい

る．その中でグツコーは，ジロンド派とモンターニュ派が没落し，「ロベスピエールの権威が高まっている」[8]フランス革命の状況をまず説明し，さらにかれは革命を障害と考えているダントン派と，それを「メシア的救済の理念」として推進させようとしているロベスピエール派の対立に論及する．そしてかれはこういう．「ビューヒナーの描写はスケッチ風」[9]であるが，鋭い輪郭はわれわれを知らず知らずのうちにその世界へ引き込む．「かれはドラマや筋の代わりに，死に瀕している断末魔のけいれんや呻きを表わしている．」[10]さらにこの作品の「形象とアンチテーゼの中に，機智，エスプリとエレガンスの一切が輝いている」[11]と．こうしてグツコーは，ビューヒナーがインマーマンやグラッベを凌駕している旨を述べ，ここでもかれを高く評価するのである．しかしグツコーは，この論評を執筆した際に当時の検閲によって，『ダントンの死』を「政治的」な側面からでなく，「文学的」な側面から批評することを余儀なくされていた．というのも，かれは1835年7月23日付のビューヒナー宛の手紙で，この論評について「検閲によってずたずたにされたわたしの批評」(480) と述べているからである．したがってグツコーの真意は，現在残っているこの論評より，政治的側面を強調したかったに相違ない．

やがてビューヒナーは前述のグツコーの手紙を通じて，『ダントンの死』が出版され，グツコーがその批評を書いたことを知るが，この時点でかれはまだ現物を見ておらず，おそらくこれを手にしたのは，その直後であろう．というのも7月28日の手紙で，ビューヒナーは次のように書いているからである．

> ぼくのドラマについて，少し述べねばなりません．まず，いく分か変えても良いという許可が，あまりにも都合良く利用されてしまったといわざるをえません．ほとんど毎ページ削除されたり，書き加えたりしており，それがほとんどいつも全体を損ねるやり方なのです．時に

は意味が全くゆがめられたり，欠落したりして，まるで下らぬ無意味なものが埋められています．……題名は味けなくなり，きっぱり禁じていたぼくの名前がでているのです．(443)

この文面から分かるように，かれはずいぶん改竄を憤慨し，不満をもらしているが，非難の矛先はむろんグツコーと出版者に向けられている．しかしかれらは，当時の政治的・道徳的な事情から，『ダントンの死』を修正・加筆・削除することなしに出版することが，いかに困難であったかを熟知していた．

グツコーはのちの1837年6月に，ビューヒナーへの追悼文の中で，この作品の出版に「たいへん苦労した」事情を述べ，こう回想している．

この作品にはサンキュロットの風が吹きまくっていた．ここには人権宣言がバラで飾られているが，あからさまに濶歩していた．全体をまとめあげている理念が，赤い帽子であった[12]．

ここでグツコーは，二年前に『フェニックス』誌上で行なった「文学的」批評より，この作品の政治的なラジカルさを強調している．この時点ではビューヒナーは死去し，『ダントンの死』はすでに出版されていた．もうグツコーは検閲官や世間へ配慮する必要もない．したがってこの追悼文で，かれは自分の真実のダントン像を述べているのであろう．さらにグツコーは，当時の自己の行為を次のように位置づけ，謝罪・弁明する．

検閲官に削除の楽しみを与えないように自分自らこの仕事を行ない，作品にはびこっている民主主義を，事前検閲の鋏で切り取った．その時わたしは，われわれの風紀と状況の犠牲にされねばならなかったこの本の削除部が，全体の中で最も個性的で最も特長的な部分であった

ことを，十分感じていた．機智や満ちあふれる思想がほとばしり出ている民衆の場面のきわどい対話は，採用できなかった．……ビューヒナーの真の『ダントン』は，世に出なかった．出版されたものは，いやいやわたしがやった破壊の残骸であり，まに合わせの残物である[13]．

グツコーは「政治」と「道徳」の面から『ダントンの死』を「事前検閲」せざるをえなかった．当時の言論統制下では，自主規制によって当局の目をごまかす術策は常套手段であった．グツコーはすでに1832年に，かれが匿名で書いた『次のヴュルテンベルク領邦議会への予言』でも，「事前検閲」に抵触し，部分的な削除を余儀なくされていた[14]．以下のメンツェルとグツコーの論争の個所で詳述するが，かれの長編小説『懐疑婦人ヴァリー』（以下『ヴァリー』と略述）も出版禁止処分を受け，かれは投獄されるのである．上述の弁明はその当事者のものであるから，より重みがあるといえよう，すでに『ヘッセンの急使』においても，ビューヒナーの同志のヴァイディヒが「加筆・修正」を行なったが，その文書を出版したために，ビューヒナーは「大逆罪」のかどで次のような『逮捕状』を公布され，「指名手配」されるのである．

次ノ特徴ヲモツダルムシュタット出身デ，医学生ノゲオルク・ビューヒナーハ，大逆罪ナル策謀ニ加担シタ容疑ニヨリ，裁判所ニテ取リ調ベヲ受ケルベキトコロ，ワガ国ヨリ逃亡シテコレヲ逃レシモノナリ．ヨッテ，当人ガ立チ廻リシ際ニハ逮捕シ，厳シク監視ノウエ，下記ノトコロヘ移送スルコトヲ，国内外関係官庁ニ要請スルモノナリ．（このあとにビューヒナーの人相書きが続く．）[15]

事実グツコーは，『フランクフルター・ジャーナル』に掲載された（1835

年6月27日）この『逮捕状』を知るのであるが，われわれはしたがって，反体制派弾圧の嵐の中であらゆる困難を排除し，ビューヒナーの出版要請を実行したグツコーの努力を，大いに評価すべきであろう．グツコーはさらにビューヒナーの死後も『レンツ』や『レオンスとレーナ』の出版に尽力したのである．

II

さてビューヒナーとグツコーとのかかわりを示す証拠として，幻の雑誌『ドイツ評論』がある．グツコーが同じ「青年ドイツ派」のヴィーンバルクとともに，『ドイツ評論』を出版する計画をたて，ビューヒナーにも投稿依頼をするのであるが，それは1835年8月28日付のビューヒナー宛の手紙に披歴されている．これに関してビューヒナーは，同年9月20日付の手紙で，家族に少し得意そうに「運が向いて来た」(448) 旨を述べ，さらに10月に短編『レンツ』を『ドイツ評論』に掲載する予定であることを報告している．続いて同年11月2日にかれはこういう．

> ぼくの名前が最近，『アルゲマイネ・ツァイトゥング』に大きく出ました．大文芸雑誌『ドイツ評論』のことですが，それにぼくが記事を寄せるべく約束していたのです．この雑誌は出版される前から攻撃されていますが，それもハイネ，ベルネ，ムント，シュルツ，ビューヒナーなどの名前を挙げさえすれば，この雑誌が博するであろう成功がわかるというものです．(449)

注目すべき点は，ビューヒナーが一連の「青年ドイツ派」の作家と同列に自らの名前を連ねていることである．これをもって，かれが「青年ドイツ派」と思想的に一致していたと考えるのは早計である．H. マイアーも

指摘しているように，『青年ドイツ派』内には「共通項」はあったが，これは「流派」ではなかった[16]．そもそも「青年ドイツ派」という名前も，かれら自身ではなく当局が付けたものである．さらに『ドイツ評論』は，なるほど「ドイツにおけるあらゆる進歩勢力を結集する場になるはず」[17]であった．しかし，その出版カタログにも記載されているように，これは「元来の政治色を持っているが，多様なニュアンスを許すもの」[18]である．したがってビューヒナーは，文筆活動においてこの進歩的勢力とゆるやかな連帯を考えていたのではないか．ところがこの『ドイツ評論』は，当局によって禁止されてしまうのである．その中心的役割を演じたのは，批評家のメンツェルであった．

メンツェルと「青年ドイツ派」との関係は，三月革命前期の文学史においても，きわめて重要な課題であり，この時代を位置づけるキーポイントになると思われる．したがってわれわれは，メンツェルとグツコーとの関係[19]を少し詳しく考究し，そのかかわりからビューヒナーに論及してみたい．

まずメンツェルは1820年代からゲーテに対抗し，執拗に反ゲーテ的な批評活動を行なったことで有名である．国粋的であったが，リベラル派でもあったかれは，ハイネやベルネにも影響を与え，さらにグツコーの「最初の指導者」であり，「援助者」でもあった．事実，グツコーは1831年から34年にかけて，メンツェルの主宰する『文芸草紙』に協力者として参画し，批評活動を行なう．が，グツコーがかれから独立し，ヴィーンバルクとともに『ドイツ評論』の出版計画をたてた（1835年）頃から，両者の関係は険悪となってゆく．その伏線は，グツコーがシュライアーマッハーの『ルツィンデ』に関する書簡の序文を書き，「聖職者と宮廷」を激怒させたことにある．グツコーによって批評家としての主導的地位を脅かされたメンツェルは，リベラル派から封建体制擁護のイデオローグに廻り，教会とも結託してグツコー批判の先鋒となる．その槍玉に挙げられたのは，か

れの『ヴァリー』であった．グツコーとメンツェルの『ヴァリー』論争は，メッテルニヒ検閲政策の最後の「とどめ」ともいうべき，「青年ドイツ派の著作物禁止」条項成立の誘因となるだけでなく，三月革命前期の当局と反体制ジャーナリストの対決のピークを形成することからも，極めて重要な意味を持っている．ではここでツィーグラーの『ドイツの文学検閲』に基づいて，その経緯を簡単に要約しておこう．

1835年8月12日	グツコー『ヴァリー』をレーヴェンタール社より出版．
1835年9月1日，14日，10月19日	メンツェルの『ヴァリー』に対する批判が三部に分かれて出る．
1835年9月19日	グツコー『メンツェルへの反対声明』を出す．
1835年9月24日	メンツェルの『反対声明』．プロイセンで『ヴァリー』が発禁となる．
1835年9月28日	グツコーがメンツェルの攻撃について，ビューヒナーに手紙を書く．
1835年10月20日	レーヴェンタール社出版停止．
1835年10月23—26日	メンツェルの『不道徳文学』．
1835年10月26日	グツコーとヴィーンバルク，反メンツェルの『声明』を出す．
1835年11月	グツコーの『メンツェルに対する弁明と読者の二・三の意見の是正』．
1835年11月14日	メンツェルの『二度目でかつ最後の反対声明』．
1835年11月24日	フランクフルトにて『ヴァリー』発禁．
1835年11月	グツコーの『健全な理性へのアピール』．
1835年11月30日	グツコー，マンハイムにて逮捕．
1835年12月4日	グツコー，ビューヒナーへ近況報告．

1835年12月 8 日　　ヴュルテンベルクにて『ヴァリー』発禁.
1835年12月10日　　連邦議会決議による「青年ドイツ派著作発禁」.
1836年 1 月13日　　グツコー禁錮四週間の判決下る.
1836年 2 月10日　　グツコー釈放，バーデンから追放さる[20].

論争の中心となった『ヴァリー』は，多感で情熱的な女主人公が信仰と愛に悩み，自殺するという小説である．ここにはテーマである宗教と性の解放の問題が，当時の「世代の基本的な生活感情の『内面分裂』」[21] との関連において描写されている．この小説をめぐるグツコー側と，反『ヴァリー』キャンペーンを張るメンツェル側の対決において，具体的に何が問題となっていたのかをさらに詳しく検討してみよう．グツコーは1835年 9 月28日付のビューヒナー宛の手紙の中で，次のように述べている．

> わたし個人に対するメンツェルの哀れな攻撃については，ご存知のことでしょう．かれの破廉恥ぶりには，対応せざるをえませんでした．……わたしがかれのもとで相変らず第二ヴァイオリンを弾き，将来かれの遺言の執行人にでもなってやれば，メンツェルは喜んだのでしょう．かれはもう大論争のための理論を持っていません．ゲーテを攻撃して最後の弾薬を使いはたしてしまったのです．そこでわたしを突き落すために，宗教・道徳そしてわたしの生き方を持ち出してきたのです．(482)

この文面からも理解できるように，メンツェルのグツコー批判は，政治的側面からではなく，宗教的・道徳的側面からなされている．まずメンツェルは，グツコー批判の『声明』の中で次のようにいう．「かれの長編小説は，病的で打算的かつむんむんするような情欲に満ちあふれている．著者はまだいかがわしさが足りないと見えて，恋人をこれ見よがしにあから

さまに裸にするのである.」[22] その結果,「善良な人物は恥じ入るにちがいない.」[23] 問題は「青年ドイツ派」の領袖である「かれが,猥褻な行為で世の中を変革しようとしている」[24] 点にある. さらにメンツェルは, この作品に見られる反キリスト教的な個所を指摘して,「グツコーはキリスト教を破壊しようとしているのか,……かれ自ら新しい宗教を打ち建てようとしているのか」[25] と揶揄する.

以上のようなメンツェルの攻撃に対して, グツコーは反メンツェルの著作の中で次のように反論する. まず宗教についてこういう.

> わたしのキリスト教に対するすべての批判は, その根源に, つまりキリスト教の最初の歴史的な出現に遡及しているのである.……ただひとつわたしがあえて行なったことは, 世の中が宗教なしでも存在しえたかどうか, 少し考えてみたことである. わたしが述べたのは, もし世の中が神のことを全く知らなかったら, そしてもしいかさま師が出現せず, 民衆たちを迷信で縛りつけなかったら, 世の中はもっと幸福であろうということだ.……つまり残酷な宗教戦争が行なわれなかったら, 世の中はもっと幸福であるだろう.……人々は宗教をめぐって何という苦しみを体験しているのかを, わたしは『ヴァリー』の中で描写しようとしたのである[26].

グツコーははっきりとした無神論の立場を標榜しているのではなく, かつ全面的に神を否定しているのでもない. 鋭い批評家としてかれは, 今まで絶対視されていた神を「批判的」に考察することによって, そのベールをはぎとり, 実像を探ろうとしたのである.「宗教的な伝統」に対する懐疑は, 当時の「青年ドイツ派」にも共通する意識であって, ムントも1835年に『マドンナ』で, カトリックに拘束されない生き方を示している.

次に『ヴァリー』の不道徳性について, グツコーは, この作品の女主人

公が結婚式の夜，夫のシーザーに裸体を見せる場面を暗示してこういう．「道徳的な点において，逸脱しているといえる所が一個所この作品にはみられる……が，文芸が造形的な古代の赤裸々な姿を容認するならば，近年それはすばらしい進歩をとげるであろう」[27] と．「自分は教師ではなく作家である」[28] と自認するかれは，旧態依然とした道徳の桎梏から逃れることによって，文学の地平に新しい境地を切り拓こうとしたのである．ビューヒナーもこの点について，1836年1月1日付の手紙の中で，「不道徳的だと大げさにさわぎたてるのは，大衆をわが方へひき寄せる常套手段なのです」(451) と述べ，グツコーを弁護している．とりわけかれは，『ダントンの死』における卑猥な個所について攻撃された経験を持つだけに，『ヴァリー』への非難が不当なものだと考えたのであろう．

さらにグツコーは結婚観について次のようにいう．

> わたしの結婚観は，まず未婚で子供を作ることも恥であろうはずがないということに基づいている．愛のないところに子供は生まれない．愛は常軌をはずれていることも正当化する．なぜ結婚しない関係を追求し，かれらを祭壇の前へ行くように強いるのか．……もし結婚しないで子供を作ることにこだわらなければ，……それとともに貴族や階級意識，嫉妬，エゴイズムもなくなるであろう[30]．

ここには当時流行していたアンファンタンの「肉の解放」の影響がみられ，グツコーも一面ではハイネの「肉体・現世の愛の賛美」という感覚主義と，軌を一にしていたことが理解できる．が，かれのいう結婚観は，「精神と肉体，感情と思想」が一つに融合した意味において成り立つのであって，メンツェルらが誤解したような，単なる肉欲の賛美に基づくものではなかった．要するにグツコーは，従来の伝統的な宗教観，道徳観，結婚観を否定し，これらの桎梏を越えた視点から，人間の解放を意図してい

たのである．かれの批評活動も，そのための一種の Provokation であったといえよう．

メンツェルのグツコー批判は，他の「青年ドイツ派」にも波紋を投げかけ，ヴィーンバルクは『メンツェルと青年文学』を，コッテンカンプは『反メンツェル』を，ラウベは『青年文学』を，ムントは『でっちあげられたカテゴリー』を執筆し，グツコーを擁護した．この『ヴァリー』に関する評論の出版物は，84を数えた[31]ということからも，当時，この本がいかに話題になったかが理解できよう．このような状況の中で，当局が手をこまねいていたわけではない．

すでに前に引用した年表でも分かるように，一番先に反応を示し，『ヴァリー』を発禁にしたのは，保守的なプロイセンであった．その措置はフランクフルト，ヴュルテンベルクへと波及してゆく．こうして連邦議会は，1835年12月10日に次のような断固たる決議をしたのである．

> 全連邦政府ハ，「青年ドイツ派」アルイハ「青年文学派」ナル名デ知ラレタ文学流派ノ著者，出版者，印刷者，著作ノ販売者ニ反対スル義務ヲ引キ受ケルモノナリ．カカル「青年ドイツ派」ニハ，就中ハイネ，グツコー，ラウベ，ヴィーンバルク，ムントラガカカワリシモノナリ……[32]

グツコーはこの決議を待つまでもなく，11月30日にマンハイムで逮捕されていた．ハイネやベルネはフランスに亡命していたので，当局の追求をかわすことができたけれども，ドイツではグツコーだけでなくラウベも逮捕され，のちに禁錮7年を申し渡されるのである．このように「連邦議会決議」は「青年ドイツ派」に猛威をふるったが，グツコーは1835年12月4日付の手紙で，ビューヒナーに次のように書く．

友よ，わたしは牢獄に入っています．……まず第一に，これはわたしが宗教を攻撃したかどによるものです．……自由であるあなたは何と幸せであることか．わたしは長い間苦しめられるでしょう．メンツェルがわたしをこんな目にあわせたのです．(482f.)

ビューヒナーは1836年1月1日に，「グツコーは今までに崇高で強い性格をみせつけてきましたが，大人物の試験を受けたのです．……かれは自分の領域で勇敢に自由のために闘ってきました」(451) と述べている．自ら逮捕の危険性を乗り越えた経験を持つビューヒナーがグツコーの境遇に同情し，かれを弁護したのは当然のことであった．

さらにビューヒナーは同年1月のグツコー宛の手紙で，「釈放されたらできるだけ早くドイツを離れて下さい」(452) と忠告している．ドイツで政治活動をすることの困難さを身をもって知っていたビューヒナーは，かれにも亡命を勧めるのである．つづいて1836年（日付不明）のグツコー宛の手紙でも，ビューヒナーは，「あなたに対する攻撃の中には，徹底的な卑劣さがみられます．そしてドイツの要塞の中にいる政治音痴の人々に対するメンツェルの嘲笑ときたら……ぼくは心底から怒っています」(454f.) と書き送り，メンツェルを憎悪している．以上のように，対メンツェルとの関係において，両者は同じ陣営の中にいたことは明らかである．当然のことながら，かれらの共通の敵は，メンツェルの背後にいる封建反動勢力であった．

では両者を駆りたてていた闘争のエネルギーは何であったのか．それは「憎悪の原理」であるといえる．グツコーは『フェニックス』の序文の中で，「憎しみ，軽蔑する術を学んだ」[33] と述べ，かれの批評活動の根底にある行動原理を披歴している．ビューヒナーも同様に，1834年2月の手紙の中で，「憎しみは愛と同じく許されています．ぼくは軽蔑する連中に，思

う存分憎しみをいだくのです」(423) という．かれのラジカルな政治活動も，人間を抑圧する者へ対する「憎悪の原理」に根ざしていたのである．

Ⅲ

以上のようにビューヒナーとグツコーは，メンツェルの攻撃に対して協同戦線を張り，両者の資質にも共通項がみられる．しかし現実認識や社会活動そして文学観の面では，二人はかなり異なっていた．まずここでグツコーのこれらの面における基本的姿勢を略述しておこう．ハイネと同様に，フランス七月革命によって政治的・文学的な触発を受けたグツコーは，「芸術時代」から「行動の時代」への転換期に，とりわけジャーナリズムの分野にすぐれた業績を残した．『文芸草紙』の編集にたずさわったかれは，「文学革命は批評によってなされる」，「批評は復讐の女神以上のものだ．それはわれわれの希望の手段である．……というのも，祖国，自由……つまり全未来は，批評の庇護のもとへ逃げ込んだからだ」[34]という．このようにグツコーは，とりわけ批評を重視し，これをかれの文学やジャーナリズム活動の中心に位置づけ，新しいジャンルを切り拓いたのである．他の「青年ドイツ派」と同様に，現実生活と文学を表裏一体と見做したかれにとって，批評はいわばかれの現実や状況に対するアンガージュマンでもあった．グツコーが扱う批評の中心課題は，宗教と道徳である．1835年の手紙の中で，かれは「教会を解体し，国家を解体することが，わたしには重要なのです」[35] という．ハイネが『ドイツの宗教・哲学史考』で，ドイツの革命の問題を宗教とのかかわりから考察しているが，グツコーも宗教や道徳批判の側面から，鋭い政治批判を行なっている．こうしてグツコーは，自由主義的・民主主義的な理念に基づいて，「知識階級」の側から「社会変革」を志向するのである．が，かれの活動は「理念の闘争」[36] であったので，一面では観念的な傾向も免れえなかった．

さてビューヒナーは，グツコーとの見解の相違を，手紙の中で二度述べている．まずかれは1836年1月1日付の家族宛の手紙で，「ぼくはハイネやグツコーの文学流派である，いわゆる『青年ドイツ派』には属していません」(451) と断言している．その理由としてビューヒナーは，かれらが「われわれの社会状況を完全に見誤って」(451)，「時事文学によってわれわれの宗教的・社会的理念の変革を，全く可能だと思って」(451f.) いるという点を挙げている．かれはこの立場をさらにより明確に，1836年（日付不明）のグツコー宛の手紙の中で，次のように披歴する．

> 理念によって，知識階級によって社会を変革するなんて，不可能なことです．今の時代はまったく物質的です．あなた方がもっと直接政治的に行動を起こしていたら，変革が自然に止まる点に達していたことでしょう．あなた方は知識階級と非知識階級社会の間の裂け目を，越えようとはしないのです．(455)

「貧富の関係がこの世で唯一の革命的要素である」(441) と考えるビューヒナーは，民衆の物質的な窮状が革命を引き起こすのであって，知識人による上からの文筆活動によっては，革命が不可能であると主張している．教養階級や知識階級に信頼を置いていなかったかれは，「新しい精神生活の形成を民衆に求め，腐敗した現代社会をくたばらせねばなりません」(455) と述べ，明確な階級意識をもって，下層の民衆の地平から革命を志向していたのである．すなわち，グツコーの文筆活動の Adressat は主として知識人であったが，ビューヒナーのパンフレットのそれは，農民であった．政治活動を通じて，啓蒙主義の限界を再認識したビューヒナーは，唯物論的立場からグツコーのブルジョワ的限界を批判したのである．

次にビューヒナーは，グツコーを含めた「青年ドイツ派」の結婚観や女性観にも賛同しない旨を，1836年1月1日付の手紙に述べている．グツコ

ーの結婚観については前に述べたが，ビューヒナーはすでに1833年にサン・シモニストの女性観にふれ，皮肉めいた調子で次のようにからかっている．

> サン・シモニストの場合には男女は平等で，かれらは同じ政治的権利を持っています．かれらには父親がいて，これが教祖のサン・シモンなのです．が，当然母親も必要です．これを求めて，かれらは旅に出たのです．……ルソー君は相棒といっしょにドイツで女性を求めようとしました．……ぼくもすっかり怠けてサン・シモニストになりたい程です．(418)

ビューヒナーがここで論及しているのは，シュトラースブルクで直接出会った知人達の自由恋愛についてであるが，その根底にはかれらのユートピア的行動に賛同できないニュアンスが漂っている．当時，恋人のミンナとの固い愛情に結ばれていたかれは，(かの女が牧師の娘であることも配慮したのであろうが) 伝統的な結婚生活を念頭に描いていた．『ダントンの死』に登場する，夫への愛のために後追い自殺するジュリーとリュシールの中に，かれの女性像が形象化されているが，これはグツコーの主張する新しいタイプの女性とは，明らかにコントラストをなしているといえよう[37]．

ところでビューヒナーとグツコーにおけるゲーテ観も，かなり異なっている．メンツェルのエキセントリックなゲーテ批判については少し触れたが，ハイネやベルネ，ヴィーンバルクらのゲーテに対する反発も周知の事実である．これは「芸術時代の終焉」を標榜する「青年ドイツ派」の共通する態度であった．グツコーもその例外ではない．かれは『フェニックス』の中で，「王政復古の時代はわれわれに一かたまりの過去，つまり名声という専制主義，ゲーテ・シラーという宗教を残した」[38]が，その時代は七月革命とともに終わり，「別の傾向が生まれた」[39]という．行動や現実

とのかかわりを重視する「青年ドイツ派」は，とりわけゲーテと封建体制を二重写しにして，かれの非政治性や貴族性の側面に批判のウェイトを置いたのである．この点についてビューヒナーと比較してみよう．

かれは1835年7月の手紙の中で，「ゲーテやシェイクスピアを高く評価する」(444) 旨を述べているが，『レンツ』にも次のような表現が見られる．

> 創作されたものが生命を持っているという感覚は，美醜より上位にあり，芸術作品の唯一の規準なのである．……それがシェイクスピアには見い出され，民謡にあっては完全に，ゲーテにおいては幾度か人々の胸に響いてくる[39]．

ビューヒナーのゲーテ観は，政治的視点からではなく，常にかれの文学観と固く結びついている．芸術作品の価値を瑞々しい生命の躍動の中に見い出したビューヒナーは，「青年ドイツ派」のようにゲーテを否定せず，かれの作品のリアリズムを高く評価する．ここに「青年ドイツ派」との大きな相違点がある．ビューヒナーも「青年ドイツ派」も現実に対して鋭い批判を行なったのであるが，かれはその現実を表現する際，それを「傾向」という狭い枠内に限定しない．「理念」や「観念」でなく，リアリティを重視するビューヒナーは，過去の歴史や人物からも素材を求め，幅広く自由に創作活動をした．したがって「青年ドイツ派」の傾向文学は，当時大きな影響力を持ちえたが，あまりにも「時代精神」に拘束されていたために，時の経過とともに忘れ去られたのである．それに対し，ビューヒナー文学が現代においても受容され，「青年ドイツ派」のそれより優位性を保っているのは，かれのリアリズムの斬新な表現手法に一因があったといえよう．

以上のようにわれわれは，ビューヒナーとグツコーの往復書簡を手がかりにして，当時の検閲の問題や両者の世界観・文学観などを比較してきた．二人が交流した1835年は，三月革命前期の中でもとりわけ「青年ドイツ派」と封建体制派との対決がピークをなす，記念すべき年であった．これまでの考察から，検閲制度が反体制派にいかに猛威をふるっていたかが理解できよう．奇しくもこの時期に，ビューヒナーは唯物論的革命家として，グツコーはリベラルな反体制派として，当局から厳しい追求を受ける．このような弾圧が，立場を異にする両者を結果的には結びつけることになった．時事文学や理念による変革は不可能であるとするビューヒナーは，「青年ドイツ派」と一線を画していたけれども，封建体制批判やその体制を補完している道徳律批判の点では，グツコーと立場を一にして協同戦線を張ったのである．

両者を比較した場合，思想的にも文学的にもビューヒナーの方が，ラジカルかつ現代的であったいう結論は，容易に下せるであろう．が，グツコーは現在の文芸批評家の評価のために活動をしたのではない．厳しい検閲下でもドイツにとどまり，粘り強く文筆活動を続けたグツコーは，当時の反体制運動の苦渋と困難さを最も良く知っていた知識人であった．文学的 Provakation と批評によって，かれはハイネやベルネらとともに，「行動の時代」の文学に新たな地平を拓いたが，この業績は高く評価すべきであろう．さらにビューヒナー受容史に輝かしい一ページを飾った人物として，のちに無名のエンゲルスをも援助したジャーナリストとして，グツコーの名前を忘れることはできないのである．

テクスト

Georg Büchner, Sämtliche Werke und Briefe, Hamburg 1971, Bd. 2. 本文中の（　）内の数字は，引用したテクストの頁数を表わす．なお訳文については，『ゲオルク・ビューヒナー全集』河出書房，1970年を参照した。

注

1 三月革命前期の検閲に関しては，E. Ziegler, *Literarische Zensur in Deutschland* 1819—1848, München 1983や，D. Breuer, *Geschichte der literarischen Zensur in Deutschland,* Heidelberg 1982, *Verboten! Das Junge Deutschland 1835,* hrsg. von J. C. Hauschild, Düsseldorf 1985 などを参照した.

2 E. Ziegler, a. a. O., S. 118.

3 Ibid. S. 119.

4 Vgl. Von W. W. Behrens u. a., *Der literarische Vormärz 1830 bis 1847,* München 1973, S. 25ff.

5 E. Ziegler, a. a. O., S. 122.

6 *Die geheimen Wiener Beschlüsse vom 12. Juni 1834*, in: *Verboten! Das Junge Deutschland 1835*, a. a. O., S. 35.

7 E. Ziegler, a. a. O., S. 122.

8 *Phönix Frühlings-Zeitung für Deutschland* (Red. K. Gutzkow), in: H. Steinecke, *Literaturkritik des Jungen Deutschland Entwicklungen-Tendenzen-Texte,* Berlin 1982, S. 95.

9 Ibid., S. 96.

10 Ibid., S. 96.

11 Ibid., S. 96.

12 K. Gutzkow, *Georg Büchner,* in: *Deutsche Literaturkritik im 19. Jahrhundert,* hrsg. von H. Mayer, Frankfurt a. M. 1976, S. 148.

13 Ibid., S. 148.

14 Vgl. *Verboten! Das Junge Deutschland 1835*, a. a. O., S. 32f.

15 Büchners Steckbrief im Frankfurter Journal, in: *Georg Büchner,* hrsg. von T. M. Mayer, Frankfurt a. M. 1987, S. 85.

16 Vgl. H. Mayer, *Georg Büchner und seine Zeit,* Frankfurt a. M. S. 406.

17 *Verboten! Das Junge Deutschland 1835*, a. a. O., S. 70.

18 Ibid., S. 55.

19 Vgl. H. Steinecke, a. a. O., S. 75ff.

20 E. Ziegler, a. a. O., 158f. ただしグツコーとビューヒナーとの関係を表わす日付の項は，筆者の挿入によるものである.

21 Ibid., S. 161.

22 W. Menzel, *Drei Abfertigung des Dr. Gutzkow,* in: *Politische Avantgarde 1830—1840 Eine Dokumentation zum Jungen Deutschland,* hrsg. von A. Estermann, Frankfurt a. M. 1972, S. 43.

23 Ibid., S. 43.

24 Ibid., S. 43.

25 Ibid., S. 46.

26 K. Gutzkow, *Vertheidigung gegen Menzel und Berichtigung einiger Urtheile im Publikum,* in: *Politische Avantgarde 1830—1840*, a. a. O., S. 81.

27 Ibid., S. 82.

28 K. Gutzkow, *Appellation an den gesunden Menschenverstand,* in: *Politische Avantgarde 1830—1840*, a. a. O., S. 100.

29 道徳に関してグツコーと比較する意味から，ビューヒナーの手紙を引用しておきたい．„Was übrigens die sogennante Unsittlichkeit meines Buchs angeht, so habe ich Forgendes zu antworten: ..... Ich kann doch aus einem Danton und Banditen der Revolution nicht Tugendhelden machen! Wenn ich ihre Liederlichkeit schildern wollte, so mußte ich sie eben liederlich sein, wenn ich ihre Gottlosigkeit zeigen wollte, so mußte ich sie eben wie Atheisten sprechen lassen. ..... Der Dichter ist kein Lehrer der Moral, er erfindet und schafft Gestalten, ... (Text, S. 444) ここからも，ビューヒナーの「反道徳的」な作品は，かれのリアリズムの理論に基づいていたことが理解できよう。

30 K. Gutzkow, *Vertheidigung gegen Menzel und Berichtigung einiger Urtheile im Publikum,* a. a. O., S. 83.

31 Vgl. E. Ziegler, a. a. O., S. 162.

32 *Protokoll der deutschen Bundesversammlung* 1835, in: E. Ziegler, a. a. O., S. 13.

33 *Phönix* (Red. K. Gutzkow), in: H. Steinecke, a. a. O., S. 79.

34 Ibid., S. 79.

35 Zitiert nach: R. Rosenberg, *Literaturverhältnisse im deutschen Vormärz,* Berlin 1975, S. 116.

36 Vgl. ibid., S. 120.

37 ただしビューヒナーは『ダントンの死』では，キリスト教の道徳律に縛られていないマリオンを登場させ，エピキュリアンとして自然のおもむくままに生きる娼婦を肯定的に描写している．

38 *Phönix* (Red. K. Gutzkow), a. a. O., S. 77.

39 Ibid., S. 78.

40 *G. Büchner, Sämtliche Werke und Briefe,* a. a. O., Bd. I, S. 449.

G. Büchner und K. Gutzkow

——Zu Problemen der Literatur und der Zensur im Vormärz——

Takashi Hamamoto

Büchner hatte in seinem kurzen Leben besonders engen Kontakt mit Gutzkow, der Kritiker und Hauptperson des Jungen Deutschlands im Vormärz war. Gutzkow sah mit scharfem Blick in dem noch unbekannten Büchner eine außerordentliche literarische Begabung und schätzte ihn sehr hoch ein. Trotz der strengen Zensur bemühte er sich, Büchners Drama *Dantons Tod* zu veröffentlichen. Ohne Gutzkows Unterstütung und Ermunterung hätte Büchner seinen Lebensweg als Dramatiker nicht gehen können. Heute stehen uns 20 Briefe von Büchner und Gutzkow, die ein wichtigstes Dokument der 30er Jahre des 19. Jahrhunderts sind, zur Verfühgung. In dieser kleinen Abhandlung soll das Problem der Zensur und der Literatur in der damaligen Zeit anhand des Briefwechsels klargemacht werden. Dieser Briefwechsel gibt uns die Möglichkeit, den Zusammenhang zwischen Politik und Literatur im Vormärz noch tiefer zu untersuchen.

Menzel, der Ende der 20er Jahre schon ein führender Kritiker war, gegen Goethe eine heftige Kritik übte und Börne und Heine beeinflußte, spielte bei der Zensur eine große Rolle. Gutzkow war eigentlich ein Schüler und Mitarbeiter Menzels, hatte aber unabhängig von ihm enge Beziehungen mit dem Jungen Deutschland und seine Beziehungen zu Menzel entfremdeten sich. Als Gutzkow 1835 die Gründung der Zeitschrift *Die Deutsche Revue* plante, fühlte sich Menzel in seiner „Vorherrschaft als Kritiker" bedroht und es kam zwischen ihnen zum Streit. Im geheimen Einverständnis mit der feudalen Regierung und der Kirche kritisierte Menzel Gutzkow stark. Besonders Gutzkows Roman *Wally, die*

Verzweiflerin stellte er vom moralischen Standpunkt ausgesehen unter heftige Kritik. Sein Werk fiel durch die Zensur und er wurde, weil er gegen die Gesetze der Zensur verstoßen hatte, verhaftet. Gutzkow schrieb an Büchner: „Ich sitze im Gefängnis ... . Menzel hat mich soweit gebracht.“ Büchner, der auch von der Regierung verfolgt wurde und nach Straßburg immigrierte, verteidigte Gutzkow natürlich gegen die Angriffe Menzels.

Man kann jedoch übersehen, daß vom sozialen Standpunkt hergesehen, es zwischen Büchner und Gutzkow einen großen Unterschied gab. Büchner schrieb im Brief an seine Familie: „Übrigens gehöre ich *für meine Person* keineswegs zu dem sogenannten *Jungen Deutschland,* der literarischen Partei Gutzkows und Heines. Nur ein völliges Mißkennen unserer gesellschaftlichen Verhältnisse konnte die Leute glauben machen, daß durch die Tagesliteratur eine völlige Umgestaltung unserer religiösen und gesellschaftlichen Ideen möglich sei.“ Nach Büchners Meinung sei es unmöglich, die Revolution durch das ideale Schlagwort und die Ideen der Intellektuellen herbeizuführen. Vom Standpunkt des Materialismus ausgesehen glaubte Büchner, daß „das Verhältnis zwischen Armen und Reichen das einzige revolutionäre Element in der Welt“ sei. Im Vergleich zum Jungen Deutschland war Büchner noch radikaler. Der Meinungsunterschied zwischen Büchner und Gutzkow läßt erkennen, wie schwer damals die soziale Umgestaltung des feudalen Systems unter den herrschenden Bedingungen war.